

(115 頁への追加資料：23.11.1) サマリアの女との出会い (ヨハネ 4:4-42)

このエピソードをドラマの起承転結の構成に区分することができる。

起：4:7-15.

承：4:16-26.

転：4:27-38

結：4:39-42

結

サマリアの町は、創世記に登場するヤコブの物語 (創世 33:18) と関係の深い有名な場所のことであろう。

とにかくこのエピソードは、ヨハネ福音書特有の誤解を伴う典型的な教授形態をとっている。

「生きた水」は、流れる水、湧き出る水で、パレスチナ地方では非常に大切にされている。

また、ユダヤ文学では、この貴重な水は神の知恵と教えのシンボルでもある。とにかく、サマリアの女はそれを、ただ単なる自然水と理解したのであるが、イエスは彼の神性の啓示を受け入れる人々にとって生きた水として与えられる聖霊のことを語っている。従って、原始キリスト教共同体は、秘跡的文脈において、イエスの教えへと導き、聖霊を受ける洗礼の水としてそれを理解していたであろう。

次に、イエスは両国民に、新しい礼拝の場を提供する。

それは、場所に限定されるものではなく、真理の霊から溢れ出る礼拝にほかならない。勿論、神がその霊をくださる。

ヨハネ文書で「神は霊」(同上 14:17)、「神は光」(1:4)、「神は愛」(1ヨハネ 4:8b)である。これらは、神の本質の定義ではないが、神の人間への関わり方と表していると言えよう。

とにかく、神は、人間にその霊を与え、また、人間を愛し、彼らの光である独り子を与えるのである。

だから、人間はその霊のおかげで、父なる神を礼拝することが出来るのである。

このエピソードの結論は、人目を避けるような後ろめたい生き方をしていた女がなんとサマリアの最初の宣教者になった事である。